Ⅱ－６　インフルエンザ陽性を示した検死体の３例

○町田 光司[1, 2]
（社団医療法人白鷗会 まちだ内科クリニック[1] 青森県警察医会[2]）

インフルエンザによる死亡者は、関連死を加えると新型肺炎より遥かに多いと考えられるが、検死体での検討は少ない。昨シーズン２０１９年１２月から２０２０年４月３０日までの検死体１４３例中、インフルエンザ検査を１０例に施行した結果、陽性は３例で、いずれもＡ型であった。

当院でのインフルエンザ患者数は、２０１８年から２０１９年は３５４人、２０１９年から２０２０年は２４５人であったが、今シーズンはわずかに１人と、インフルエンザの流行は見られていない。

昨シーズン中、検死例でインフルエンザ陽性者が出たのは、１２月１名と、１月２名で、インフルエンザ患者数が多い時期であった。

症例１．８６歳女。高血圧、脂質異常症。肺炎と敗血症にて死亡。１２月１日から高熱、咳、眩暈等の症状があり、１２月３日の受診予定日に死亡が確認された。

症例２．７４歳男。高血圧、脂質異常症、高尿酸血症。肺炎によるうっ血性心不全の増悪により、１月２日便所で死亡していた。

症例３．６４歳男。高血圧、肝硬変、悪性リンパ腫があるものの清掃員として働いていたが、肺炎にて死亡。１２月３１日より咳や体調不良を訴え、１月５日の受診予定日に死亡が確認された。

インフルエンザでは肺炎や基礎疾患の増悪を招くことがあり、早期の診断と治療、特にウイルス量を減らす事が重要と考えられる。又、検死体の中にもインフルエンザ陽性者が存在すると考えられ、今後共積極的に検索すべきである。